台大日本語文研究第 35 期
2018 年 6 月，頁 57-85
2018-03-21 收稿，2018-05-11 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.201806_(35).0003

《源氏物語》的異文—以麥生本、中京大本及阿里莫本系統為主—

林欣慧*

摘要

長久以來，源氏物語諸本中青表紙本系統的本文佔有絕對地位。而大島本因被判定與之最為相近，故諸多注釋書皆採用之為底本。一方面，近年可時常聽到如下呼籲——除青表紙本外，其他版本的表現方式也該受到重視。源氏物語版本眾多。其中，尤以特徵極其相似的麥生本、中京大本與阿里莫本這三本抄寫本與主流版本相比之下較具變化。

此外，雖說源氏物語版本眾多，但散逸者也為數不少。在此狀況下，具同樣特徵的版本，尚能保存三本之多，可推測使用此文本之讀者應該不在少數。因此，探討此三本之特色；得知其原本改寫者之意圖，可說有其研究意義。

然而，雖說近年推廣此類非青表紙本的版本之研究，但其往往有以下兩點問題：一為偏重因所謂「待遇表現」導致的人物造型差異；二為將視野限縮於此類較小眾版本之內。

正視各版本之特色確實重要。但源氏物語之所以廣受重視；評價甚高，其與諸多文藝密不可分這一點不可忽略。

承上，於此論文中，將不偏重特定變化，而將客觀記錄與他本本文相較下之具代表性異同，並思考其結果可能與周邊文藝有何種關聯，以期發現此類異本不同的研究價值與可能性。

關鍵字：源氏物語、大島本、麥生本、中京大本、阿里莫本

* 台灣大學日本語文學系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Variants of *The Tale of Genji*—Cases of Munyuobon, Chyuokyoodaibon and Arimobon

Hsin-hui Lin *

Abstract

Most scholars have focused on the restoration of Aobyoushibon. However, over the past few years, many scholars discover that they should not be narrow-minded but open to other editions. This is why many researchers begin to investigate other non-prototype proofreading editions.

Among all of the editions, more variations could be explored in Munyuubon, Chyuukyoudaibon, Arimabon rather than other editoins. Besides, this edtion exists while many edtioins lost. Therefore, the research of this edition should be meaningful.

However, the precedent study only focuses on the editors' interpretation of the characters. For this reason, this thesis intends to survey not only the characters but also the possibility of the connection between these editions and literatures or cultures around. By doing so, it hopes to explore the possibilities of non-prototype proofreading editions just like Munyuobon, Chyuokyoodaibon and Arimobon.

Keywords: The Tale of Genji, Ooshimabon, Munyuubon, Chyuukyoudaibon, Arimabon

* Assistant Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

『源氏物語』の異文—麦生本、中京大本および阿里莫本系統を中心に—

林欣慧*

要旨

従来、『源氏物語』の研究において、青表紙系の本文が絶対的な地位を占めてきた。しかし、近年、それ以外の諸本も尊重されるべきということが喚起されている。

その中でも、高い親近性が認められる麦生本、中京大本、および阿里莫本の三本の本文は比較的変化に富むものと考えられる。また、散逸した写本も多々ある中で、同じ特徴を有する写本が三本も現存していることから、その本文には少なからず享受者がいたことが推測される。そのため、この三本の本文の特色について考察することに意義があると言えよう。

しかし、従来の研究には、待遇表現による人物造形の変化に関心が偏り、マイナーな写本内部に終始してしまう嫌いが認められる。『源氏物語』が評価される理由として、周辺の文芸の形成に大きく関与していることは看過できない。

以上から、本論においては、待遇表現に偏らず、あくまで他本と比較したところ、浮き彫りとなった問題を客観的に記録する。その上で、このような異同が周辺の文芸にどのように関わりうるか、という問いに答えることも試みる。それによって、従来と異なる異本の研究価値と可能性を発掘したい。

キーワード：源氏物語・大島本・麦生本・中京大本・阿里莫本

* 国立台湾大学日本語文学科助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

『源氏物語』の異文—麦生本、中京大本および阿里莫本を中心に—

林欣慧

一、序論—諸本研究の背景

従来、『源氏物語』の研究において、池田亀鑑氏の提唱により、定家の校訂した、いわゆる青表紙系の本文が絶対的な地位を占め、それに最も近いとされる大島本の本文も各注釈書の底本として使用されてきた。しかし、近年、青表紙本だけでなく、それ以外の諸本の「表現世界」（即ち異同に反映された、『源氏物語』に対する書写者の独自の解釈）も尊重されるべき、ということが喚起されている。

青表紙本と享受者を二分していた河内本や古態が認められることから重宝される陽明文庫本など、『源氏物語』の写本は実に多くある。その中でも、高い親近性が認められる麦生本（44 巻現存）、中京大本（若菜上・下・橋姫・総角・早蕨の 5 巻のみ現存）、および阿里莫本（54 巻に雲隠六帖を取り合わせて 60 巻現存）の三本の本文は、青表紙本、および河内本の流布本にあたる両系統のそれと比べ、比較的変化に富むものと考えられる。

また、『源氏物語』の写本が多くあるとはいえ、散逸した写本も多々ある中で、同じ特徴を有する写本が三本も現存していることから、青表紙本・河内本にこそ及ばないが、その本文には少なからず享受者がいたことが推測される。そのため、この三本の本文の特色について考察し、書写者の意図を明らかにすることに意味があると言えよう。

二、先行研究

本文の考察に先立ち、麦生本をはじめとする三本の先行研究について説明しておきたい。

（一）写本の素性

麦生本をはじめとするこの三本について、夙に『源氏物語大成』

臺灣大學學術期刊資料庫

（以下『大成』）において、以下の二点が指摘されている。青表紙本と河内本のどちらにも属さない、いわゆる「別本」と判定できる本文を有する巻として、麦生本は 26 巻、阿里莫本は 28 巻数えられるということ[1]と、該当巻の本文は「註釋的意圖」によって取扱われたものと分類できることである[2]。

しかし、各巻の性質が、果たしてどのように判定されたのかは判然としない。中京大本に至っては、脚光すら浴びなかった。そのため、岡嶌偉久子氏は一連の論著[3]において、この三本の、青表紙本と河内本との親疎関係について精査を行った。その結果、池田亀鑑氏の分類は概ね頷けるものの、首巻の桐壷巻において、阿里莫本が除外されていることから、その結論に疑問をも呈している[4]。

その上で、その本文は青表紙本もしくは河内本を下地とした混成本文であること、混成の状態が巻によってまちまちであること[5]、および麦生本と中京大本がほぼ同文であるのに対し、阿里莫本は表記において比較的に異同が多く見られ、直接的な伝写関係にないことをも指摘している[6]。首肯できる見解である。

更に、氏はその伝来と書写状況などの書誌的情報から、三本の祖本の書写者の身分として､以下の可能性があることを指摘している。九州大名の家臣にあたる麦生「鑑綱側近の文学的素養のある、つまり当時においては連歌をよく詠む配下の武将あたり」､「職業的な色彩の強い者」もしくは「連歌師」である[7]。

但し、氏の論考は、本文研究に欠かせない書誌的情報の提供に大いに寄与しているが、池田氏による「註釋的意圖」という評価の所

1 池田亀鑑（1979）『源氏物語大成』八版、東京都、中央公論社。校異篇各巻巻頭の採択表による。
2 前掲書巻七第五章第一節「別本の種類」p．174。
3 岡嶌偉久子（1988）「源氏物語阿里莫本―『源氏物語不採用二十六帖』について―」『ビブリア天理図書館報』90、天理大学をはじめ、同（1992）「中京大学図書館蔵『源氏物語』について：麦生本・阿里莫本との関係」『中京大学図書館学紀要』13、中京大学などが挙げられる。
4 前掲注岡嶌（1988）p．43
5 注 3 岡嶌（1988）p．41
6 注 3 岡嶌（1992）p．40・42
7 注 3 岡嶌（1992）p．36

臺灣大學學術期刊資料庫

以はなお釈然としておらず、流布本との異文の性質の考察は、次の論著に俟たなければならない。

（二）本文の特徴

青表紙本以外の写本への研究意識を喚起する第一人者として、伊井春樹氏は知られている。その一環として、伊井氏は中京大本の若菜上巻における考察に値する数箇所の本文について論考を行っている[8]。中でも、次の点が興味深い。式部卿宮の呼称について、青表紙本に「大宮」とある箇所が、同本および阿里莫本には「おほぢ宮」とあり、直前の呼称と一致することになっているのである。このことから、この系統の本文には、より「正当」な表現を心がける意図がある、或いはこの系統こそが場面重視の定家本による補正がなされる前の原型を留めているという二つの可能性があることを示唆している[9]。

また、後に藤井日出子氏も同本の若菜巻に着目し、以下の三点を指摘している。同本には他本と比べると、文章が簡略化されているが、寧ろ理解しやすくなっている点、他本に「ども」とある箇所が「など」とあるように、他本にない語彙が使用される点、および待遇表現の一つにあたる敬語の増減が著しい点である[10]。その上で、三点目の敬語の変化を手掛かりに、上述の論文をはじめ、中京大本における女三宮、中君などの物語後半部分の女君たちの造形と位置付けについて一連の考察を行っている[11]。

しかし、前者に関しては、「註釋的意圖」という一言を理解することに寄与しているが、目的が本文研究の新しい方向性を示唆することにあるため、考察は若菜上巻の、五箇所にとどまっている。後者も書写者の人物造形に、それも中京大本に限られる嫌いがあるため、

8 伊井春樹（1992）「中京大学図書館蔵『源氏物語』本文の性格」『中京大学図書館学紀要』13、中京大学が挙げられる。
9 前掲注 p. 23-25
10 藤井日出子（1993）「中京大学図書館蔵『源氏物語』について―若菜上巻の本文の特性―」『中京大学図書館学紀要』15、中京大学
11 藤井日出子（1994）「中京大学図書館蔵『源氏物語』若菜下の本文について―女三宮の造形をめぐって―」『解釈学』11、解釈学事務局などが挙げられる。

臺灣大學學術期刊資料庫

いずれも麦生本を代表とするこの系統の本文を全面的に考察したものとは言い難い。そのため、麦生本をはじめとする三本の源氏物語享受史における位置付けを知るにはなお不充分である。

以上から、麦生本・中京大本・阿里莫本の三本を考察するにあたり、次のような認識が必要である。まず、前述の通り、麦生本・阿里莫本は、大成において、巻ごとの性質が池田氏によって判定されている。しかし、その中、別本と認められる巻として、麦生本の場合は、帚木巻が欠巻であるため、桐壷巻・空蝉巻の後、間を置いて薄雲巻である。夕顔巻に豊富な異文が見られるにもかかわらず、校異採用本のリストに挙がっていないのである。阿里莫本に至っては、桐壷巻が別本として採用されている麦生本と高い親近性が認められ、帚木巻も桐壷巻より異文が豊富な様相を見せるにもかかわらず、ともに校異に使用されておらず、空蝉巻から間を置いて薄雲巻と、検討する余地がある。そのため、異同の文芸的解釈を行う前に、各巻の性質を客観的に確認しておく必要がある。

また、諸本の「表現世界」を尊重することが推奨される一方、前述のように、待遇表現による人物造形の変化に関心が偏る嫌いも認められる。諸本の各自の個性を認めることは無論重要であるが、『源氏物語』が評価される理由として、周辺の文芸形成に大きく関与していることも挙げられる。そのため、書写者の意図を解き明かすのみならず、その本文が周辺にどのように関わりうるか、という問いに答えることも試みたい。

本稿は本文系統の再確認のため、岡嶌氏によって、疑義が呈されている首巻の桐壷巻から夕顔巻までの四巻は勿論、池田氏によると別本系統の本文を持つ巻として、空蝉巻に継ぐ薄雲巻も、用例の信憑性を判断する上で参考となることから、考察対象とした。

紙幅の制限、中京大本の上述の五巻が欠巻であること、および流布本に対する別本の異質性を分かりやすく示すことを考え、対校表には大島・尾州家・麦生・阿里莫の四本のみ示し、以下の要領で作成する。先に青表紙本系の代表として大島本の本文を、その上に河

臺灣大學學術期刊資料庫

内本系の代表として尾州家河内本の異文を示す。次に流布本に対する別本二本の異文を示す。但し、現存状況が異なることから、桐壷巻・空蝉巻・夕顔巻・薄雲巻は大島本・尾州家本・麦生本・阿里莫本、帚木巻は大島本・尾州家本・阿里莫本のみとなる。

引用の本文は次による。大島本は『大成』、尾州家河内本は秋山虔・池田利夫（1977）『尾州家河内本源氏物語　第一巻』武蔵野書院・同『尾州家河内本源氏物語　第二巻』、麦生本・阿里莫本は伊井春樹他（1989）『源氏物語別本集成　第一巻』桜楓社・同（1992）『源氏物語別本集成　第五巻』（以下『別本集成』）による。引用の末尾には、大島本・尾州家本は頁数（漢数字）・行数（算用数字）、麦生本・阿里莫本は『別本集成』の文節番号を示す。また、引用部分の濁点・句読点・鍵括弧は私に付し、踊り字は横書の体裁を考え、＜踊り字＞で示すことにした。

三、表記と親疎関係

繰り返しになるが、系統内部の解釈的考察を行う前に、各巻の親疎関係を把握しておく必要がある。その判断基準として、語句の異同の他に、表記も挙げられている。

例えば、加藤洋介氏は大島本に着目し、同本は「ばかり」という語彙を仮名ではなく、漢字の「許」で表記する箇所において、肖柏本・正徹本・書陵部蔵三条西家本・大正大学と近似性が認められることを指摘している。その上で、このような傾向は伝本の親疎関係を判断する手段として活用できることを示唆している[12]。

この説を踏まえ、田村隆氏は更に、「涙」のような、仮名・漢字のみならず、別字（「泪」）も存在する、表記に多様性のある語彙を駆使すれば、諸本間の関係をより精密に考証することに役立てると論じている[13]。

[12] 加藤洋介（2009）「大島本源氏物語の本文成立事情―若菜下巻の場合―」『大島本源氏物語の再検討』和泉書院
[13] 田村隆（2012）「「涙」の表記情報」『国語国文』81-2、京都大学

臺灣大學學術期刊資料庫

両氏の論考を踏まえ、本稿も表記を手がかりに、各巻の親疎関係を確認してみたい。

（一）「哀」と「あはれ」

「あはれ」を仮名ではなく、漢字の「哀」で表す傾向は夙に着目されている。例えば、今西祐一郎氏によって、「哀」が明石巻に集中していることが指摘されている[14]。同じ表記の転換は麦生・阿里莫本においても確認できるが、上述の指摘とはまた異なる様相を呈している。

同系統の親疎関係を判断する上で使える語彙を選出するために、以下のような作業を行った。『別本集成』で諸本の本文を精読し、当該語彙が現れる箇所を記録するのみならず、統計の精密性を高めるために、大島本の本文検索が可能である角川古典大観[15]における大島本の使用状況も照らし合わせた。なお粗があるかと思われるが、以上のように可能な限り用例を網羅したところ、麦生・阿里莫本が漢字の「哀」の使用数に関しては諸本の中で、群を抜いていることが分かった。

池田氏によって別本と判定される桐壷巻と空蝉巻を基準に見ると、前者は諸本を合わせての 12 例中に 8 例、後者は 4 例中に 2 例が他本において確認できない。この比例から、「哀」は麦生・阿里莫本の個性に関わるものと言える。

ところが、空蝉巻の 2 例とも両本が共有するものではない。また、桐壷巻も 8 例中、共有例が 2 例のみで、近世書写の阿里莫本独自のものが 5 例にも達する。この分布状況から、他本に比べ、同系統に属する写本は「哀」の使用頻度こそ比較的高いが、同系統「共通」の表記特色として認められるには不足がある。

これに対し、次の語彙はどうだろう。

（二）麦生・阿里莫本の「おぼす」と「おもほす」

麦生・阿里莫本の表記のもう一つの特色として、終止形が「おぼす」（おぼゆ）である動詞を「おもほす」（おもほゆ）で表記する現

[14] 今西祐一郎（2001）「表記を検索する」『源氏研究』6、翰林書房
[15] 伊井春樹（1999）『CD-ROM 版　角川古典大観「源氏物語」』角川書店

臺灣大學學術期刊資料庫

象が挙げられる。

「あはれ」と「哀」の場合と同じ作業を行ったところ、以下の結果が得られた。原型が「おぼす」もしくは「おぼゆ」である動詞として、諸本合わせて、桐壷巻は 79 箇所、空蝉巻は 29 箇所見られる。その中、麦生・阿里莫本が「おもほす」（おもゆ）とある箇所は前者は 70 箇所、後者は 24 箇所数えられる。いずれも「おもほす」（おもゆ）が 8 割ほど占めている事実が分かる。

無論、他本に影響され、忠実に書写したに過ぎないと疑われることは想定できる。そこで、敢えて他本と重複するものを差し引き、麦生･阿里莫本にのみ確認できる用例を計算しても、前者は 41 箇所、後者は 11 箇所も数えられ、当該表記がいかにこの系統の独自性に関わるかが窺い知れる。

その上、桐壷巻は 41 箇所中、麦生・阿里莫本共有のものが 18 例にも及び、他の 23 例も麦生本所有とはいえ、同本が先行写本であるため、阿里莫本の方が書写時の校訂により抹消されたという推論が成立し、当該表記をこの系統の原初段階の特色と位置づける反証にはならない。更に、空蝉巻に至っては、11 例中、10 例も麦生・阿里莫本の共有例である。以上から、当該表記をこの系統に属するか否かの判断基準の一つとして採用することは頷けるだろう。

この結果を踏まえ、池田氏が別本系統から除外した帚木巻と、岡嶌氏によっても分類について疑義が呈されている[16]夕顔巻の性質を確定するために、「おぼす」の表記状況を調査した。但し、両巻とも膨大であるため、調査に際し、以下のような基準で行った。

『別本集成』を確認したところ、帚木巻の文節数は 025432、夕顔は 045536 まで振られている。作業量と用例数の信憑性を考えた結果として、前者は 022823 まで、後者は 042865 までと、それぞれ半分ほどの文節を調査することにした。

[16] 注 3 岡嶌（1988）「「青・河・別」とした巻は 4 夕顔・5 若紫…の六帖。これらは 4 夕顔を例外として（後述する）」p. 41・「4 夕顔巻は、一応「青・河・別」としたが、…独自の異文を豊富に持つ巻である」p. 43

臺灣大學學術期刊資料庫

その結果、原型が「おぼす」もしくは「おぼゆ」である語彙として、前者は 27 箇所、後者は 65 箇所数えられる。一見、夕顔巻の方が優勢のようであるが、その内実は全く逆なものである。

帚木巻は 27 箇所中、「おもほす」（おもゆ）とあるものが 22 箇所数えられる上、その中の 21 箇所が阿里莫本の独自例であり、上記の表記状況に符合するため、現段階では、やはり同系統のものと考えるべきであろう。

一方、夕顔巻は 65 箇所あるにもかかわらず、麦生・阿里莫本は 15 箇所しか数えられない。更に、麦生・阿里莫本独自の例となると、僅か 5 例のみで、同系統のこの特色は見る影もない。

この調査結果と池田氏の判断結果と照らし合わせると、長文の異同の他に、「おもほす」（おもほゆ）も採用されたという可能性がある。この表記の差異によって、長い異同がほぼ等しくあるにもかかわらず、採択の際に、桐壺巻において、阿里莫本のみが除外されるという、岡嶌氏も不審に思う結果を導いたと考えられる。但し、帚木巻の場合は除外された理由は依然として不明である。或いは孤本であり、信憑性不足と思われたためか。

上述の結果から、以下はまず当該表記の傾向に従う巻の本文を考察した後で、夕顔巻の確認に入る。

四、書写者の意図—置き換え

異文の性質は、以下の三種に分類できる。概ね他本に相当する部分があるものの、異なる表現が使用されているもの、言葉が付け加えられているように見えるもの、および短くなっているものである。夕顔巻に陽明本と近しい異文が見られる[17]ことから、三本の祖本が室町時代成立とはいえ、その流布本に対する異同を、早急に全て後

[17] 例えば、陽明文庫本に「かた」（042494）とある箇所において、諸本の中で唯一同じ語句を有する。また、完全に一致するわけではないが、042385 において、大島本・尾州家本ともに「ことのさまにたがひたり」とあるのに対し、陽明文庫本に「物ぐるをしければ」と、麦生本・阿里莫本に「心ぐるしければ」と、ともに「ぐ」「る」「し」「ければ」を有することから、比較的近しいと言えるような箇所も見られる。

臺灣大學學術期刊資料庫

人による改変と見なすことが躊躇われる。が、便宜上、やはり「置き換え」、「増補」および「簡略化」と称し、それぞれの実態を確認していきたい。本節では、置き換えを取り上げる。

（一）結果

1、類義

置き換えの例として、藤井氏が指摘した、他本にない類義語が使用されるような箇所は確かに見られる。例えば、帚木巻における、暗闇の中で源氏が空蝉に忍び寄る場面には、次のような異同が見られる。

＜例 4-1-1＞

【大島本】（下）・【尾州家河内本】（上）※以下略

けはひしつる所（ほど）にいり給（たま）へれば…（六八 11）・（四一 17）

【阿里莫本】

けはひしつる方に（024165-67）

底本に「ほど」とある尾州家本を使用していたが、空間表現には適切でないと判断し、「方」に変更したという経緯が考えられる。しかし、語彙の置き換えは意味に関わらないものに限らない。

2、異義

明石の君が泣く泣く姫君を二条院に送り出す一節である。

＜例 4-1-2＞

【大島本】・【尾州家河内本】

かたごとのころはいとうつくしうて、袖（そで）をとらへて「のり給（たま）へ」とひくも…（六〇七 12-13）（一〇一 18-一〇二 01）

【麦生本】・【阿里莫本】

かたごとのやうにさへづるもいとうつくしうて、袖をとらへて「のり給へ」とひ・・・・・くも（したひたまふも）…（190594-0602）

姫君の声を形容する表現として、他本の「声」に対し、同系統には「囀る」とある。「のやうに」からも分かるように、「かたごと」には幼児の話し方を描くのにも使用できることが念頭になく、「訛語」

臺灣大學學術期刊資料庫

と理解した上で、要らぬ改変を行った。

3、整合性

上述のような語意に関わるものに対し、帚木巻には異なる意図に基づいた例が見られる。

＜例 4-1-3-A＞

方違えの夜に強引に契りを結んだものの、一向に靡く様子を見せない空蝉を思いきれず、源氏がその継子にあたる紀伊守を介して、弟の小君に伝言を頼もうとする一節である。

【大島本】・【尾州家河内本】

おぼしわびてきのかみをめしたり。「かのありし・権中納言のこは、えさせてんや（む）…」（七三 09-10）・（四四 16）

【阿里莫本】

おもぼしわびてきのかみをめしたり。「かのありし故衛門督のこはえさせてんや…」（024766-73）

紙幅の関係で引用を省くが、同じく別本に属する陽明文庫本を含め、他本にもれなく「（権）中納言の子」とある箇所が「故衛門督の子」とあるのである。何故このような異同が存在するのか。空蝉兄弟の素性が初めて言及された場面に戻って確認したい。

源氏が方違えに、紀伊守邸を訪れた際に、小君の出自について紀伊守が説明する一節である。

＜例 4-1-3-B＞

【大島本】・【尾州家河内本】

「これは故衛門督（こゑもんのかみ）のすゑのこにて…」（六六 09）・（四〇12）

【阿里莫本】

「これは故右衛門督の末の子にて…」（023891-93）

阿里莫本を含め、諸本とも「故衛門督」とある。伊井氏の指摘と一致するものであり、麦生本・阿里莫本・中京大本がある一定した意図と基準に基づいて書写されたことが証明できる好例と言える。また、若菜上巻の例では、本文の前後関係は決めかねるが、場面に応じる人物関係による補正の必要性がないと思われる本例から、以

臺灣大學學術期刊資料庫

下のことが推論できる。

一見阿里莫本の方が、二箇所とも同じ官位で、整合の取れた本文であるが、元々一致していた無難な本文をわざと改変する理由が思い当たらない。寧ろ阿里莫本の当該箇所こそ、人物の官位に細心の注意を払い、前後に齟齬のないよう、改変を加えた結果と考えられる。

（二）異同の是非

上述の「囀る」の例からも既に分かるように、このような置き換えは常に前後の文脈に相応しいものとは言えない。例えば、源氏から託された言葉を伝えようとしたところ、空蝉に厳しく叱られる小君を描く一節がある。

＜例 4-2＞

【大島本】・【尾州家河内本】

はづかしめ給(たまふ)。ひだりみぎにくるしう思(おも)へど、かの御てならひ…（九四 10-11）・（五六 12）

【麦生本】・【阿里莫本】

はづかしめ給ふに、かほうちあかめてゐたり。御てならひを…（031204-10）

勿論、両者とも補正が入り、繊細に加筆される前の原型を留めたものという可能性もあるが、流布本に、「左右に」と、板挟みになっている小君の苦渋する姿が活写されているのに対し、麦生・阿里莫本の本文では、羞恥を感じることしか分からず、具体的な心情が伝わらず、いい改変とは言えない。

五、書写者の意図―簡略化

次に、他本と比べ、簡略化しているように見える箇所が存在する理由について確認していきたい。

（一）結果

1.簡明化

藤井氏が指摘した、簡略化によって、かえって理解しやすくなった箇所は確かに見られる。例えば、雨夜の品定めの、左馬頭が指喰

臺灣大學學術期刊資料庫

いの女について語る場面で、その嫉妬癖がおさまらないことを非難する一節である。

＜例 5-1-1＞

【大島本】・【尾州家河内本】

たゞこのにくきかたひとつなん心(こゝろ)おさめ難(がたう)し。（四九07）・（二九 17）

【阿里莫本】

たゞ此にくき心ひとつなんおさめがたう侍し。（021780-88）

流布本においては、「にくきかた」の後に、更に「心」を繰り返した上で、左馬頭自身が浮気癖を慎む意として使用された「おさめ」と併用している。そのため、主語が混乱する恐れがあり、阿里莫本の方がより分かりやすいものと言える。

2.冗文削除

また、暗闇の中で、二度目の逢瀬を目がけて近づいてくる源氏の香りを、空蝉が不審に思い、寝床から頭を挙げ、あたりの様子を窺う描写にも異同が見られる。

＜例 5-1-2＞

【大島本】・【尾州家河内本】

かうばしくう打(ち)にほふに、かほをもたげたるに、ひとへうち打(か)けたる几帳(き丁)のすきまに見(たる)れば、くらけれど（九〇08-09）・（五四 03-04）

【麦生本】・【阿里莫本】

かうばしううちにほふに、かほをもたげて木丁のすきまに、くらけれど…（030680-90）

流布本の両本とも具体的に几帳の状態まで描いているのに対し、麦生本と阿里莫本にはそれがない。冗長とも捉えられかねない状況描写を省き、速やかに物語の本筋に進みたい意図が見て取れる。

3.整合性

しかし、上述の方法にとどまらない例が見られる。空蝉に逃げられた後の源氏を描く一節である。

臺灣大學學術期刊資料庫

＜例 5-1-3-A＞

【大島本】・【尾州家河内本】

あ有りつるこうちぎを**さすがに**御ぞのし下たにひきいれて**おほとのごもれり**。こ・君をおまへにふせて…（九三 12-13）・（五六 03）

【麦生本】・【阿里莫本】

有つるこうちぎを身にそへて、小こ君をおまへにふせて…（031105-031114）

空蝉のつれなさを恨みつつ、その逃げ際に脱ぎ捨てられた一重の小袿を離さないどころか、その弟の小君をも伴わせる描写である。流布本と比べ、麦生本・阿里莫本において、「さすがに」によって源氏の矛盾が鮮やかに表現される筆法がない点はさておき、細かい状況描写を省く以外にも、「おほとのごもれり」の部分が削除されていることに注意されたい。その理由は何だろうか。当該場面の続きを見ると、小君に恨みごとを並べ立てる描写がある上に、諸本漏れなく、

＜例 5-1-3-B＞

【大島本】・【尾州家河内本】・【麦生本】・【阿里莫本】

しばしうちやすみ給へど、ねられ給はず…（九四 01-02）・（五六 04-05）・（031136）

とある。このことから、「おほとのごもれり」は本文の整合性を壊すものと判断し、削除した経緯が推測される。但し、このような削除は時に主語を分かりにくくすることがあるため、やはり全面的に賛同するわけにはいかない。

六、書写者の意図ー増補

次に、他本と比べると、文字数が増加しているように見える例を見ていきたい。

（一）結果

＜例 6-1＞

【大島本】・【尾州家河内本】

臺灣大學學術期刊資料庫

このきはにたてたるびやう(屏)風…（八六 12）・（五二 01）

【麦生本】・【阿里莫本】

此もやのきはにたてられたるびやうぶも…（030208-11）

小君に手引きを頼み、紀伊守邸に潜入し、空蝉を垣間見ようとする源氏の目に沿って、屋敷の空間が具に描かれる。その込み入った寝殿造りに関する描写の中で、「母屋の」という一言を付け加えることによって、空間描写を読者により明確に伝えようとする工夫によるものと考えられる。但し、流布本のそれが、源氏が立っている際という意味であるのに対し、この一言によって、母屋の中であることが分かるものの、却って具体的な位置が分からなくなる問題が生じた。

以上から、語句を増補する目的として、やはり読者に状況をより分かりやすく伝えることが挙げられ、両本の流布本に対する異文も、概ねこのような意図に基づいてなされた後世の改変と考えられる。ところが、それが時に裏目に出る。

（二）異同の是非

執拗に冷淡さを責める源氏に、空蝉が心中を訴える一節である。＜例 6-2＞

【大島本】・【尾州家河内本】

わがたのみにて・・(も又見)みなをし給ふ(×)のちせを(×)も・・(やと)おもひ…（七一 07-08）・（四三 11）

【阿里莫本】

わがたのみにても又見なをし給のちせの山もやと思…（024496-4502）

「のちせ」の後に流布本にない「の山」が見られる。その理由は何だろうか。当該箇所の注釈を確認したところ、『源氏釈』以来、次の古今六帖の歌が指摘されている。「若狭後瀬の山の後も逢はむ我が思ふ人に今日ならずとも」である。このことから、阿里莫本の方がより引き歌が分かりやすい本文と言える。

しかし、ここでは、「後」に再び逢「瀬」する機会という意味を表

臺灣大學學術期刊資料庫

せば十分であり、「山」まで使用しては、かえって前後の文脈とぎくしゃくする問題がある。阿里莫本の方が後人によって増補され、或いは引き歌を注記する傍書が混入した結果と考えられる。

七、夕顔巻—置き換え

「おもほす」の使用状況から、夕顔巻を隔離した。しかし、上述のような特色は、同巻にも見られるのである。以下、先に置き換えの例を見てみたい。

（一）結果

1.類義

病に伏せっていた五条の大弐の乳母のために、源氏が祈祷などを言いつける一節である。

＜例 7-1-1＞

【大島本】・【尾州家河内本】

ずほう（修法）など又（また<踊り字>）・・・はじむべき事（こと）などをきてのたまはせて…（一〇四 04-05）・（六一 01）

【麦生本】・【阿里莫本】

ずほうなど又々はじめそふべきよしいひをきて（040398-0401）

大島・尾州家両本ともに「事」とあるのに対し、麦生・阿里莫の両本には「よし」とある。書写者の語彙に対する認識による差異と考えられるが、原因を解明するには、なお両語の各時代・作品の使用傾向に関する考察が必要である。

2.異義

この類義語の置き換えの他にも、以下のように、語意に変化が生じる例も見られる。雨夜の品定め以来、空蝉をはじめ、異なる品々の女性に、源氏が興味を抱くようになった描写に見られる。

＜例 7-1-2＞

【大島本】・【尾州家河内本】

あま夜（よ）のしなさだめのゝちいぶかしく（う）おもほし（×）なる（よ）…（一〇七13）・（六三 04-05）

臺灣大學學術期刊資料庫

【麦生本】・【阿里莫本】

雨夜のしなさだめの後、ゆかしうおもほしなる…（040845-49）

流布本に「いぶかし」とある箇所が、「ゆかし」とある。若紫巻にも用例がある[18]ように、「いぶかし」には、より知りたいと思われて、心が引かれる様を表す使い方があったことは確かである。但し、現代からすると、不審に思うという語意の方が馴染まれている。このことから、時代が下るにつれ、語意の認識に変化が生じ、このような改変がなされた、という可能性が考えられる。

3.整合性

夕顔の花を一房求めたところ、花とともに、次の歌も源氏のもとへ進呈された。

＜例 7-1-3-A＞

【大島本】・【尾州家河内本】

心あてにそれかとぞみるしら露のひかりそへたるゆふがほの花（一〇四 08）・（六一 04）

【麦生本】・【阿里莫本】

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる花の夕△ほ（040419-25）

対校表にあるように、流布本に「夕顔の花」とあるのに対し、麦・阿本の両本とも「花の夕顔」とある。このような異同が生じる原因を考える際、以下の一節は看過できない。

＜例 7-1-3-B＞

【大島本】・【尾州家河内本】

よりてこそそれかともみめたそがれにほの＜踊り字＞みつるはなのゆふがほ（一〇五 08）・（六一 15）

【麦生本】・【阿里莫本】

よりてこそそれか共見めたそがれにほの＜踊り字＞みつる花の夕がほとて（040542-49）

[18] 藤壺と面ざしが似通う若紫に、源氏が心を引かれる場面である。便宜上、大成の本文のみ引用する。「あはれなりつるありさまもいぶかし…」（一五九 14）

臺灣大學學術期刊資料庫

二人の贈答において、花は人の譬えとしても使用されている。このことから、書写者が後出する「顔」で閉じる表現がより掛詞として適切と考えたため改変した、という可能性がある。

（二）異同の是非

しかし、このような異同はやはり一概に頷けることができない。六条御息所邸を離れる際の源氏の姿を描く一節である。

＜例 7-2＞

【大島本】・【尾州家河内本】

この御ひかりを見(み)たてまつる(り)あたり(る)は、ほど＜踊り字＞につけて…（一一〇14）・（六五 01）

【麦生本】・【阿里莫本】

此御すがたをみ奉りえたるは、ほど＜踊り字＞につけて…（041185-89）

源氏の美しい姿を拝見するために、人々が身分に応じて、家中の女性を仕えさせようとする描写である。流布本に、源氏の美貌を思わせる「ひかり」が使用されているのに対し、麦生本系統には、単に「すがた」とあり、その美質を際立たせるにはやや単調と思われる。無論、無粋な「すがた」こそ手を加えられる前の原型という可能性もあるが、次の例はどうだろう。

＜例 7-2-A＞

【大島本】・【尾州家河内本】

頭中将のとこなつ(ぞ)・うたがはしく、かたりし心(こゝろ)ざまXXづおも(思)ひいでられ給へど…（一一五 10-11）・（六七 15）

【麦生本】・【阿里莫本】

頭中将のなでしこうたがはしく、かたりし心ざま思出られ給へど（041769-75）

夕顔の素性を疑う源氏の心中である。頭中将との関わりを思い浮かべる部分で、流布本に、「とこ（床）なつ」とあるのに対し、麦生本・阿里莫本には「なでしこ（子）」とある。妻を象徴する「床」と子供を意味する「子」とそれぞれかけている。夕顔と頭中将の関係

臺灣大學學術期刊資料庫

性を表すには、流布本の方が適切である。それでは、なぜこのような異同が存在するのか。その原因を解明するには、頭中将と夕顔の関係性が説明される雨夜の品定めを改めて確認したい。

右大臣の四の君に苛まれ、心細く感じる夕顔は、頭中将に次のような歌を寄せた。

＜例 7-2-B＞

【大島本】・【尾州家河内本】

山(やま)がつのかきほあるともおり＜踊り字＞にあはれはかけよなでしこの露(つゆ)（五六 14）・（三四 11）・

【阿里莫本】

山がつのかきほあるともおり＜踊り字＞にあはれはかけよなでしこの露(つゆ)（022679-86）

頭中将の愛情を求め、「あはれはかけよ」と乞う文言の後に、「なでしこの露」とある。また、この歌に引きつけられ、一旦訪れたものの、夕顔の異状に気づけず、とうとう逐電されてしまったことに対し、頭中将は次のように嘆く。

＜例 7-2-C＞

【大島本】・【尾州家河内本】

かのなでしこのらうたく侍しかば、いかでたづねむとおも(×思)ひ(×)給るを…（五七 13-14）・（三五 03）

【阿里莫本】

かのなでしこのらうたう侍しは、いかで尋んと思給るを（022785-92）

あのかわいらしい「なでしこ」を何とかして探し出したいという。夕顔が歌で自身を山がつに譬えていることと、「らうたう」の語意を看過し、安直に以上の二箇所から、「なでしこ」を夕顔と結びつけた可能性がある。

しかし、先述のように、「なでしこ」は子供、「とこなつ」こそ恋人の意で使用されることが一般的である。その上、阿里莫本を含め、

臺灣大學學術期刊資料庫

上述の夕顔詠に対し、頭中将は以下のように詠み返す。子供よりも、夕顔を持ち上げる一首である。

＜例 7-2-D＞

【大島本】・【尾州家河内本】

さきまじる色(いろ)はいづれとわかねども猶常夏(なをとこなつ)にしくものぞなき

やまとなでしこをばさしをきてまづちりをだになど、おやの心をとる（五七 04-05）・（三四 14-15）

【阿里莫本】

さきまじる色はいづれとわかねどもなをとこ夏にしく物ぞなき

やまとなでしこをばさしをきてまづちりをだになど、おやのこゝろをとる（022706-21）

ここでもやはり常夏で恋人の夕顔を指している。以上から、この「なでしこ」と「とこなつ」にまつわる異同は、やはり後世の書写者が人物の呼称や語彙の整合性を図るものの、注意不足によって、かえって場違いな表現に改悪してしまった一例として数えられよう。王朝物語の常套表現を誤ることから、書写者の教養の程度が知れる。

八、夕顔巻—簡略化

（一）結果

1.簡明化

某の院において、夕顔が物の怪に取り殺される場面の一節が挙げられる。

＜例 8-1-1＞

【大島本】・【尾州家河内本】

「…さやうの物(もの)には・・おどされじ」とて、ひきおこし給(たまふ)。「①いとうたてみだり心(こゝ)ちのあしう侍れば、②うつぶし＜踊り字＞・侍(て侍に)・や。御(お)まへにこそわりなくおぼ・・さるらめ(しめ)」といへば…（一二四 06-07）・（七二 18-七三 01）

臺灣大學學術期刊資料庫

【麦生本】・【阿里莫本】

「…さやうの物にはよもおどされじ」とて、ひきおこし給へり。「心ちのあしく侍れば。おまへにこそわりなくおぼさるらめ」といへば…（042830-47）

源氏に臆病を責められる右近が弁明するとともに、夕顔の容態が思わしくないことを報告する一節である。流布本と比べると、右近が自身の気分がすぐれないことを訴える部分が削られている。脇役ということもあるか、右近の状態を知るには、「心ちのあしう」の一節で事足りるところに、①が使用される必要性はない。

また、②については、大島本こそ「に」はないが、尾州家河内本には「候にや」とある。「にや」の前に推測される原因・理由を示し、その後に結果・現状を述べる言い回しが王朝物語に多々見られる。そのため、ここで「にや」とある一節を有し、主語の混乱を招く恐れがある尾州家本より、それがない麦生本・阿里莫本の方が読みやすいとも言える。

2.冗文削除

更なる長文の異同も見られる。怖がる右近を慰めるために、源氏が人を呼ぼうと、外に出る前の発言である。会話の区切り方に異同があるため、尾州家本も全文を示すことにする。

＜例 8-1-2-A＞

【大島本】

いとおしとおぼして「われ人をおこさむ。手たゝけば、山びこのこたふる、いとうるさし。こゝに、しばし、ちかく」とて…（一二三 05-06）

【尾州家河内本】

いとをしとおぼして、「われ人をおこさんよ」とて、てたゝけば、やまびこのみこたふる、いとうるさし。「こゝに、しばし、ちかく」とて…（七二 08）

【麦生本】【阿里莫本】

いとおしとおぼして「われ人をおこさん。こゝに、しばし、ち

臺灣大學學術期刊資料庫

かう」とて…（042702-12）

何故麦生本・阿里莫本にこの一節がないのか。諸本の頁数や文節番号を参照されたい。大成で言えば僅か四行前に以下のような一節が見られる。

＜例 8-1-2-B＞

【大島本】・【尾州家河内本】

手(て)をたゝき給(たま)へば、やまびこのこたふるこゑ・・・ばかり・いとうとまし。（一二三 01-02）・（七二 05）

【麦生本】・【阿里莫本】

御手をたゝき給へば、あまび〈△ナゾリ〉このこたふるこゑいとうとまし。（042663-70）

直前にほぼ同じ語句が使用されていたのである。確かに、極めて類似する語句が近距離で繰り返し使用されることから、清書や校正中の不注意による重複を疑わせる。麦生本・阿里莫本こそ重複が生じる前の原型かとすら思わせる一例である。

また、注目に値する箇所がもう一つある。「やまびこ」のかわりに、「あまびこ」が使用されているのである。同語は、散文よりも、和歌に多くの用例が見られる。語彙の異同には、時代性のみならず、両本の書写者の所属した集団やその教養も関わっている可能性がある。

（二）異同の是非

以上から、やはり概ね文意の簡明化につながる異同と言える。但し、以下のような例も見られる。

＜例 8-2＞

【大島本】・【尾州家河内本】

はしたなきほどにならぬさきにと、れゝのいそぎいで給て、いとかろらかにうちのせたまへれば…（一一八 14-一一九 02）・（六九 14-15）

【麦生本】・【阿里莫本】

臺灣大學學術期刊資料庫

はしたなくならぬさきにと、いそぎて、いとかるらかにのせ給へれば（042161-71）

一刻も早く夕顔との睦言に浸りたいと思う源氏は、夜が明ける前に、急いで出かけた。流布本に「はしたなきほどにならぬ」とあるのに対し、麦生本・阿里莫本には「はしたなくならぬ」とある。修飾語と述語こそ同じであるが、時間を表す「ほど」がないことから、「はしたなくな」るものは判然としない。但し、この例に関しては、前後は断定できず、補正が入る前の本文ということも、完全に退けられない。また、「ほど」を削り、直接的な連用修飾を使用する点も、その語彙や文章の使い方を考えさせ、興味深い。

以上から、同じ意図に基づいてなされる改変でも、書写者の不注意、教養不足によって、時にはかえって裏目に出ることになる。そのため、独自の異文を一概に個性と認め、手放しに鑑賞するわけにもいかず、慎重に対処する必要がある。

九、夕顔巻—増補

（一）区切り

某院で夕顔が急死したことによって、放心状態に陥る源氏に、惟光が次のように言葉をかけた。

＜例 9-1＞

【大島本】・【尾州家河内本】

「めづらかなることにも侍かな。かねてれいならず御心地（こゝちなど）・・・・・・・・ものせさせ給（×し×たまふ）ことや侍つらん」「・・・さらに・・・さること事もなかりつ」とてなきたまふ（い）さま（一二七 13-一二八 01）・（七五 04）

【麦生本】・【阿里莫本】

「めづらかなる事にも侍かな。かねて御心ちれいならず物し給事や侍つらん」**と聞こゆ**。「さらにさる事もなかりつ」とてなき給さま…（043311-27）

夕顔の急死を不審に思い、日頃の容態にも異状があったかを確認

臺灣大學學術期刊資料庫

する。これに対し、源氏は否定する。流布本のような文章の方が、確かに、間髪入れずに応答する効果を発揮する。しかし、両者の発話に、引用を表す言葉が挟まれていないため、『源氏物語』の連綿体的な文章に慣れない読者が、発話者が変わったことを見逃し、文脈に戸惑う恐れもある。

この点から、惟光の疑問の後に、一旦「と聞こゆ」とある麦生本・阿里莫本の方が、発話者が変わったことに気付かせる、読みやすい本文と言える。

（二）異同の是非

ところが、他本にない語句を有することによって、前後の描写と齟齬する例も見られる。大門の鍵が見つからないため、五条の屋敷を訪れてもらったにもかかわらず、しばらく大路で待たせてしまった非礼を謝り、惟光が源氏の乗り物を屋内に引き入れる一節である。

＜例 9-2-A＞

【大島本】・【尾州家河内本】

「おほぢにたゝ・ちおはしましゐて」とかしこまり申す。ひきいれてをり給ふ。（一〇二 9-10）・（六〇01）

【麦生本】・【阿里莫本】

「おほぢにたちおはしまして」とかしこまりて申す。こしひき入ており給。（040201-08）

流布本と比べ、惟光が源氏の乗り物を引き入れる前に、「こし」という言葉が見られる。「輿」を引き入れたということであろう。しかし、前後の描写を参照されたい。

＜例 9-2-B＞

【大島本】・【尾州家河内本】

御くるまもいたうやつしたまへり。さきも…（一〇一 08-09）・（五九 07）

【麦生本】・【阿里莫本】

御車もいたうやつし給へり。さきも…（040070-75）

臺灣大學學術期刊資料庫

源氏の乗り物として「くるま」とある上に、それが大変「やつ」されている文言も見られる。読解を考えての増補であるが、かえって場違いな語彙を使用する結果となった。

十、おわりに

麦生・阿里莫本を代表とする同本文系統には、先行研究が少なからずあるが、その各巻の性質については、依然として疑義が存在していた。

そのため、本稿では、「おもほす」という表記を手がかりに、各巻の属するべき系統について再検討したところ、夕顔巻の異質が際立った。そのため、夕顔巻を除外した四巻の考察を優先し、その異文が生じる理由について確認したところ、実にさまざまであるが、既に指摘されている、より正しい表現を使うことや、本文を簡明化しようとすることの他にも、以下の傾向が見られる。書写者は『源氏物語』の本文を評価するどころか、寧ろ常にそれに懐疑的・批判的である。

但し、ひたすら生真面目に読みやすい本文を作ろうとしすぎて、時にはかえって不必要な矛盾を招き、本文に疵を来す嫌いがある。そのため、本文における書写者の意図に耳を傾けると同時に、その問題点にも気をつけねばならない。

とはいえ、上述の諸例から、その本文には、以下のような可能性が見られる。例えば、中世の語彙の位置付けを研究する資料として、或いは参考に値する。

一方、同じような問題点と可能性は夕顔巻にも見られる。中でも、「やまびこ」が和歌を主な用例とする「あまびこ」に改変されていることから、麦生本をはじめとする三本の祖本の書写者の所属する集団とその文芸背景を考えさせる。また、「おもほす」の法則から、単独で考察することにしたが、田村隆（2012）にも指摘されているように、或いは「本文の異同に比して表記においては校合の眼をく

臺灣大學學術期刊資料庫

ぐり抜けやすく、親本の面影が残りやすい」[19]ことによる結果なのかもしれない。とすると、「おもほす」という表記は後に追加されたものと分かるが、誰がどのような目的で行ったものか。当該表記が歌語ともされていることにどのように関わっているか、という周辺の文芸に関わる新たな課題が出る。

前述のように、岡嶌氏は伝来などの書誌的情報から、書写者の素性について推測を試みたものの、裏付け不足という憾みがある。しかし、これらの異文と照らし合わせれば、実に興味深い。外部の情報のみならず、写本の本文によって、書写者乃至は享受者の推測はより確かなものとなる。また、このような全面的な語彙の考察から、写本の成立背景への認識を深め、周辺との関わりを知ってはじめて、その写本の書写者による享受のありかたに対する論考が真実に深みのあるものとなる。

【参考文献】

池田亀鑑（1979）『源氏物語大成』八版、東京都、中央公論社
岡嶌偉久子（1988）「源氏物語阿里莫本―『源氏物語不採用二十六帖』について―」『ビブリア天理図書館報』90、天理大学
岡嶌偉久子（1992）「中京大学図書館蔵『源氏物語』について：麦生本・阿里莫本との関係」『中京大学図書館学紀要』13、中京大学
伊井春樹（1992）「中京大学図書館蔵『源氏物語』本文の性格」『中京大学図書館学紀要』13、中京大学
藤井日出子（1994）「中京大学図書館蔵『源氏物語』について―若菜上巻の本文の特性―」『中京大学図書館学紀要』15、中京大学
藤井日出子（1994）「中京大学図書館蔵『源氏物語』若菜下の本文について―女三宮の造形をめぐって―」『解釈学』11、解釈学事務局
伊井春樹（1999）『CD-ROM 版　角川古典大観「源氏物語」』角川書店

[19] 注 13 田村（2012）p. 28

臺灣大學學術期刊資料庫

今西祐一郎（2001）「表記を検索する」『源氏研究』6、翰林書房
加藤洋介（2009）「大島本源氏物語の本文成立事情―若菜下巻の場合―」『大島本源氏物語の再検討』、和泉書院
田村隆（2012）「「涙」の表記情報」『国語国文』81-2、京都大学

臺灣大學學術期刊資料庫